

多様性が求められる現代に必要な能力に関する一考察：曖昧さを抱えた状況生き抜くためのnegative capabilityの可能性

その他のタイトル	A Consideration on the Necessary Capabilities in the Modern Age that Requires Diversity : Possibility of Negative Capability to Adapt to Ambiguous Situations
著者	越川 陽介, 山根 倫也
雑誌名	Psychologist : 関西大学臨床心理専門職大学院紀要
巻	10
ページ	39-49
発行年	2020-03-16
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019979

多様性が求められる現代に必要な能力に関する一考察：曖昧さを抱えた状況を生き抜くための negative capability の可能性

A Consideration on the Necessary Capabilities in the Modern Age that Requires Diversity: Possibility of Negative Capability to Adapt to Ambiguous Situations

越川 陽介

関西医科大学精神神経科学教室

山根 倫也

関西大学心理学研究科

Yosuke KOSHIKAWA

The Department of Neuropsychiatry, Kansai Medical University

Tomonari YAMANE

Graduated school of Psychology, Kansai University

◆要約◆

現代は利便性や効率の追求が高い優先度を持つ社会から、多様性が必要とされ、曖昧さを抱える社会へと変化してきている。我々はこのパラダイムシフトに適応していくために必要となる態度や能力として negative capability (ネガティブケイパビリティ) に注目する。Negative capability は詩人の Keats, J. によって提唱された概念であり、芸術、心理臨床、宗教、教育など様々な領域でその概念が用いられている。本論では negative capability の概念を概観し、曖昧さや待つという行為との関連を検討した。negative capability は曖昧さへの受容や、外見からは判断できないが、葛藤を踏み堪える過程、無私の状態、不確実性との関係の成熟の心的過程が生じている可能性について指摘した。また、多様性と曖昧さを抱える現在の社会に negative capability の概念を拡張させるために、negative capability を「事柄や状況に対し、答えの見えなさ、相反する考えや感情、あるいは同時多発的に生じる複数の思考や感情を、有機体的な自己へ貯蔵し熟成させることができる力」と定義した。不安定で不確実、複雑、曖昧な社会で答えのない問いを立て、それを問い続けるためには、negative capability を発揮することが重要になると考えられる。今後は negative capability を身に付ける方法の検討や評価スケールの作成が望まれる。

キーワード：ネガティブケイパビリティ、ポジティブケイパビリティ、曖昧さ、待つ、無私

Abstract

Present day societies are moving towards prioritising diversity and ambiguity over convenience and efficiency. The authors point to the importance of 'negative capabilities' as attitudes and abilities necessary to adapt to this paradigm shift. 'Negative capability' is a concept proposed by the poet John Keats, and is used in various fields such as art, psychology, religion and education. In this paper, we overviewed the concept of 'negative capability' and examined its relationship to ambiguity and to the act of 'waiting'. We highlighted the possibility that 'negative capability' implies the acceptance of ambiguity, the process of tolerating conflict, the state of no-self, and the psychological process of maturation in light of uncertainties. Further, in order to extend the concept of negative capability in today's society with diversity and ambiguity, we defined 'negative capability' as the ability to store and be mature about various factors by recalling events and situations such as invisible answers, conflicting thoughts/multiple thoughts and feelings that occur at the same time. We concluded that it will be important for individuals to enhance negative capability to be able to raise difficult questions about issues in a society that are volatile, uncertain, complex and ambiguous. In the future, one needs to consider how negative capability can be enhanced as well as the development of a scale to evaluate the degree to which one has negative capabilities.

Key Words: Negative capability, Positive capability, Ambiguous, Waiting, Disinterested

はじめに

現在は利便性の追求や効率さを求める社会であると考えられ、このような社会状況の一端として、経済活動の文脈に影響されるところが大きいと考えられる。中村（2019）は、これまで根強く支持されてきた経済主義的パラダイムでは、個人は効用最大化を目指す合理的利益を求める存在として捉えられていると述べている。そして、このパラダイムにおける経済学やマネジメント理論では利潤極大が唯一の指針であり、能率を求めることが無批判的に行われており、実際には多くの問題をはらんでいながらも科学的で健全なものであると広く認識されていると指摘している。この様な現状の中で、個人もまた、日常生活を送る上で生産性向上のために効率を重視するアプローチが求められている。例えば職場において、成果を短期間に求められ、数値によって管理される環境にみとれ、結果まで時間がかかることは嫌厭され、一度の失敗も許されないプレッシャーがそれにあたるといえよう。このため、個人の関心も効率的に物事を行うための方略の獲得や、省エネルギーでい

かに最大の成果を発揮できるかに向いており、時間がかかること、無駄なことに対しては、個人々々を含めた社会全体で否定的な印象を持たれていると考えられる。

このような現代を鷺田（2006）は待つことのできない社会と述べている。以前は待つという行為がありふれたもので、持ちこがれつつ時間を潰したり、期待しながら不安を抱くなど、そこで生じる背反する思いが文化にもなっていた。それに対し、現代は、長い目でものを見る余裕がなくなり、自身が決めた結末を求めるあまり、想定以外のものが視野に入らない頑なさや不寛容さを持っている。そのために、やり直しや修正を認めない姿勢や、結果が出ない場合は見切りをつけるようになってきている。そして、意のままにならないものや、どうしようもないものへの感受性や偶然を待つ姿勢などを失ってしまったとも述べている（鷺田、2006）。

効率さや利便性への指向性は、科学技術の進歩の原動力となり、経済活動を活性化する上でとても重要な役割を果たしてきたと言える。個人における即時的に解を求める姿勢や効率的な技法に関心が向かい、それを実行すること自体

は現代を生きる上で必要な態度であり行為であると言える。しかし、これらが優先される社会であるために、人としてのゆとりが無くなり、追い詰められていき、それがメンタルヘルスの問題の一因をなしている可能性が考えられる。

一方、人生100年時代と言われるように人の人生が長寿化し、教育を受けるステージ、就労するステージ、そして引退して余生を過ごすステージの3つのステージから、人々によって生き方が異なるマルチステージ化が生じ、人生の多様性が増してきている。人の人生よりも企業の寿命が短くなり、一つの企業で一生を終えることができず、3つのステージで示したような、大学に進学し、就職活動をして企業に入る、定年まで働いて残りは年金で生活をするという、ある種の型にはまったこれまでの生き方では適応出来ないという新たな問題が生じてきている(グラットン L. & スコット A., 2016)。このため、将来に対する見通しが立ちにくくなり曖昧さの中で個人々が自己決定していかないとけない時代でもあると言える。

これまでの効率さを求める生き方ではどうしても即時的な対応に偏ってしまい、先行きが不透明な現代においては根本的な対処に至らない可能性がうかがえる。人生における自己決定に不安を抱え、その選択がどのような結果をもたらすのかを待たなくてはならない時代であるともいえる。これまで優先されてきた効率化や即時的な成果が求められる社会において、自分の選択の結果がすぐにわかる、待たなくても良い状況からのパラダイムシフトが生じていると言える。ではこのパラダイムシフトに適応していくことが現代を生きる我々に求められると考えられるが、その際、個人の資質や態度としてどのような能力に注目していく必要があるのだろうか？

そこで本論では、これまでの利便性や効率の追求が高い優先度を持つ社会から、正解が不明瞭で曖昧さを抱えるようになってきたこれからの社会への変化というパラダイムシフトに対し

て、我々が適応していくために必要となる態度や能力についてnegative capability (ネガティブケイパビリティ) に注目し考察していく。

Negative capability と positive capability

ケイパビリティ (capability) は辞書 (Cambridge online dictionary) で引いてみると以下の様な意味であった。Capability: the ability to do something. さらに ability を調べると ability: the physical or mental power or skill needed to do something. であった。これらからケイパビリティは「何かをするための能力 (the ability to do something)」であり、「何かをするために必要な身体的もしくは精神的な力あるいはスキル」であると言える。杉原・田口 (2019) はこのケイパビリティには受け入れる余裕というニュアンスがあり、これは、Keats, J. によって提唱されたnegative capabilityのニュアンスであると述べている。Keats, J. は医師であり途中で詩人として活躍した人物である。イギリスのロマン派である彼が、その弟たちに送った手紙の中にnegative capabilityは登場した。1817年12月21日に送られた手紙の原文は以下の通りである。

〈略〉... I mean Negative Capability, that is, when a man is capable of being in uncertainties, mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact and reason. ...〈略〉 (Keats, J., 1899, p.277)

この様に Keats, J. はnegative capabilityを「事実や理由を性急に求めず、不確かさ、不思議さ、懐疑の中にいられる能力」と説明している。

藤本 (2005) はnegative capabilityの邦訳をめぐり、Keats, J. の書簡から彼が述べているnegative capabilityの概念の整理を行っている。そこでは松浦 (1979, p.80) の言を借り、negative capabilityは単一の指示語では表示不

可能な複合的な意味合いがあると述べている。実際、negative capability の能力として以下のように述べている。1 つに、Keats, J. が Shakespeare, W. に私淑していたことから Shakespeare, W. の生き様に注目し、そこから“偉大な詩人にあつては、「the sense of Beauty」の働き以外のものすべてを否定し去る能力の有無が問われる”（藤本, 2005, p.14）という着想に至ったとのことだった。この背景には国家の政治的体制あるいは社会問題や制度に対して反対意見ないし批判的意見を積極的に表明しない態度や慎重に振舞う姿勢に力点が置かれていることが考えられると述べられている。また、弟たちに宛てた手紙の中で Keats, J. の親密な知人であった Dilke という人物を取り上げ、人が自己に対し突きつけられる人生に関わる問題やそれによって生ずる複雑な人間関係に対処するうえで「耐える」ことや「自己抑制」することを negative capability の機能としてあげている。また、negative capability を意識し維持することにより自分自身の「拘束されない領域」を守ることができるということも述べられている。

これらの記述から筆者らは、時代的な背景に negative capability の概念が影響している点、個人における人生の問題などストレスフルな非常事態では negative capability の機能は忍耐や自己を抑制することが前景になる点、そして、negative capability を維持することによって、他者や問題などに囚われない空間を保持することができる、ということが negative capability の特徴の一側面としてあげられるのではないかと考える。

一方、positive capability (ポジティブケイパビリティ) は negative capability の対の概念として捉えられることが多く (帯木, 2017, p.9, 森山, 2001)、通常話題に上がる能力を指し、才能、才覚、物事の処理能力 (森山, 2001) とされる。杉原・田口 (2019) はケイパビリティの検討をする際の要素の一つとしてネガティブ-ポジティブの軸を挙げている。杉原・田口 (2019)

は positive capability を、時間をかけずに少ないデータでリアリティを形成し、結論に至ろうとする能力、また、与えられた課題や問題解決の能力と定義している。positive capability は非常時に求められる能力である一方、問題の出口の改善、対症療法にとどまる、部分最適に陥る、安易な選択と集中を行う、といった可能性が生じうると述べている (杉原・田口, 2019)。

この様に positive capability は我々が「能力」という単語を耳にした際にイメージできる概念であると言え、negative capability はそれと比較すると能力というにはイメージし辛い点があるかもしれない。しかし、複数の概念を含んでいる negative capability は文学分野だけでなく、心理臨床や宗教、教育など様々な領域において言及され、注目されつつある概念であると言える。次に各領域における negative capability について概観する。

各分野における negative capability

文学・芸術領域における negative capability

Keats, J. は詩人や作家が持つべき資質として negative capability をあげたことから、文学や芸術の領域においては、詩人 (芸術家) の性格と関連付けられて述べられることが多い。藤本 (2005) では本邦で出版されている6つの文学に関連する辞典から negative capability の解説をまとめている。この辞典では5つの辞典において negative capability を詩人的性格と結びつけて解説している。Keats, J. は詩人におけるアイデンティティについて「カメレオン」と表現し、安定したアイデンティティを持たないだけでなく、周囲の側面を引きうけ、他の物やキャラクターとのアイデンティティに移行することを示唆している (Fitzpatrick MA, 1981)。その他にも物事を見つめる際には私心がない状態 (disinterested) であることが大切であると言及し (松浦, 1979, p.68)、詩人の性格として自己を持たないことが資質としてあげられている。

この様な詩人的性格と negative capability を関連づけて記述される傾向が強いが、藤本 (2005) が指摘する様に両者を関連づける理由がなく、内容にも違いがあり、コンセンサスが十分に得られていない様である。

また、芸術や文学にとって重要な創造性にも negative capability に関する言及が認められる。杉原・田口 (2019) は Dewey, J. (デュエイ, 1952) が創造性に関して negative capability を取り上げていることに言及し、「人生と経験を、それに伴うすべての不確かさ、神秘さ、懐疑、中途半端な知識とともに、そのまま受容するもので、そのような経験自身の資質 (qualities) を深め強化することは、イマジネーションと芸術 (art) に発展する。」と示している。また、森山 (2001) も創造性と negative capability の関係について言及している。Sternberg (1991) の研究を引用しながら創造性の基になる認知資源のうち、性格特徴が挙げられ、その特徴が不確かさへの忍耐力であると述べている。それは「曖昧な状況に耐え」「切れ切れのものが均衡をとり一体となるのを待ち受ける能力」であると述べられており、創造行為に必要となる認知様式との関連について言及している。

また、negative capability が共感的な想像力に関連する能力であるという点から、読書が共感する力を育むという、文学に触れることの良さとの関連についても言及されている。池田 (2019) はブルックスの言をまとめ、他人としての経験、他人の人格に入り込み、その視点から物事を捉える能力が negative capability と類似するという指摘を取り上げ、negative capability を培うことに文学の意義があるのではないかと述べている。

心理臨床における negative capability

心理臨床の領域でも negative capability について注目されている。Keats, J. のこの概念を心理臨床の領域で取り上げたのは精神分析家の Bion, W. である。Bion, W. は自著の Attention

and interpretation の中で、Keats, J. の negative capability に着目し、精神分析家に必要な資質として取り上げている。Bion, W. は分析家の解釈が、患者が理解できるかどうかという点が大切であることから「達成の言語」を一つの重要な概念とした。そして「達成の言語」には不確かさ・謎・疑惑の中にとどまることができる negative capability が達成された時に形成される言語であると述べている (Bion, 1970)。そして、知らないことに持ち堪え事実が直感される方法として「記憶なく、欲望なく、理解なく」という分析家のこころの姿勢が必要であると捉えており、それは無私の言葉に近い (松木, 2009) とした。また、松木 (2009) は「知らないことにもちこたえることは、目指すものが現れるのをそれまで待つておくという能動的な姿勢を取り続けられる能力」が negative capability であるとしている。

その他にも飛谷 (2009) は思春期・青年期の心理臨床において達成することは困難であるが最も重要な心理臨床家の能力として言及されており、森山 (2001) では精神科医が診療の現場で行われる精神療法を底支えしている能力として negative capability をあげている。また、近年では精神科医で作家である帚木 (2017) が negative capability を取り上げ「どうにも答えのない、どうにも対処しようもない事態に耐える能力」と定義しており、精神科臨床や芸術、そして教育における negative capability について論じており、Keats, J. や Bion, W. などの生涯を示しながら、なぜ negative capability という概念が生まれていったのかをその人生と共に論じている。

同様に、人間性心理学の文脈においても negative capability が心理臨床家において重要な概念であることが言及されている。森岡 (2017) は negative capability と心理援助者の態度の関連性として受容性、中立性、無個性の概念と照らし合わせて検討している。なお、人間性中心療法と negative capability に関する詳細

は山根・越川（2020）を参照されたい。また、高橋（2012）はRogers, C.と関連の深い心理学者であるGendlin, E.T.の体験過程理論から曖昧なものへの関わりを検討し、暗在性やからだへの直接照合による概念化、体験的応答の観点からnegative capabilityを考察している。漠然としたもの、まだ形になっていない、「それ」としか言いようのない曖昧なものをthe Implicit（暗在的なもの：暗在性）と呼び、これは身体感覚に直接注意を向けることを通じて捉えることができ、概念化や象徴化されると述べる。そして体験過程理論においてnegative capabilityとは暗在性への耐性を持つことと述べている。また、高橋（2012）はnegative capabilityの定義を「受動的混沌の中にあって微かな違和感を感じながら、約束されたものを受け止めることで刻印付けられ、さらにそこに希望を見出す能力」と身体感覚を伴ったフレーズとして意味づけている。

以上の様に心理臨床の領域におけるnegative capabilityはセラピストや医師、心理臨床家といった、心理臨床（精神科医療）を生業とする者にとって重要な資質としてあげられているといえよう。

宗教におけるnegative capability：

杉原・田口（2019）はKeats, J.のアイデンティティは無私に押し進めた状態であり、そこにはとらわれない自由度があると述べている。そして、このあり方が道元の、文字を学ぼうとする者、仏道を勉めようとする者はの考えに共通したものと述べnegative capabilityと通じるものがあるといえるかもしれないと述べている。

また、曹洞宗の僧侶である藤田（2012）は、道元の只管打坐によって得られる寛ぎのために必要な能力としてnegative capabilityをあげている。パスカルの洞察を例に、人にとって寛ぐことや何もしないでゆったりとした気分になることは至難の技で、そもそも寛ぐということが実感としてわからないと述べている。また、寛

いでいるという状態は、目的意識から解放された状態であるため、寛ぎを手に入れようとするを目的に、努力することでは寛ぎは得られないと述べている。つまり、「くつろぐ力」というのは「わたしが～する」という積極的、能動的な力ではなくて、「～をやめる」、「～しない」という消極的、受動的な力として存在し、それがnegative capabilityに通じているとのことだった。この様に「事実や理屈を苛立って追求めたりせず、不確かさ、謎、疑問のなかに安住していることができること」を「くつろいでいられる能力」とした。

宗教におけるnegative capabilityはKeats, J.の述べた詩人的なアイデンティティである無私の側面が強調されていると考えられる。目的を持って人は行動することが通常意識されるが、一方でその目的にとらわれることによって目的の達成から離れていってしまうという矛盾に対してnegative capabilityを持つということが一つの答えとして提供されるのかもしれない。

教育におけるnegative capability：

平野（2006）は、Smith, A., Marx, K., Ferguson, A.らの経済と教育観を概観し、機械的なシステムが本質である資本主義では、社会が機械として作動するため、教育もeducationから機械的な（もしくは経済的な）instructionに変わって行ってしまうと指摘している。ここでいうeducationとは大人が子どもを観察し、子どもに潜んでいるものをく内から外へ導き出す行為であり、instructionとは大人の知恵の伝授というく外から内へ教え込むという行為である。前者は大人が子どもを養い植物の様に育てていく様な、社会のよき習俗を伝えていく行為であり、後者は大人から子どもに知識を教え込むという一方的な行為である。そして、教育は科学などの進歩を達成する人材育成の為に用いられ、また、資本主義（競争主義的）社会において、将来の成功を約束するための立身出世的システムとして学校教育が定着していっ

たと述べている（平野，2006）。このため、教育の目的が問題解決に絞られ、それを実行するために画一的な教育を行い、到達目標の設定とその達成度を測るという制度になっており（帯木，2017）、positive capability が主軸となっているといえる。しかし、帯木（2017，p.191-192）は「答えの出ない問題を探し続ける挑戦こそが教育の真髄」であると述べている。そして、現実には簡単に解決できない問題が多く存在しており、教育者には問題解決能力があること以上に、性急に問題解決してしまわない能力としてnegative capability が重要になってくると述べている。

また、杉原・田口（2019）はnegative capability がもつネガティブフリーダムのスタンスはリベラルアーツ（「自由人」が学ぶ人間教育）のスタンスに通じていると述べている。negative capability におけるネガティブフリーダムのスタンスとは時間をかけ、目的達成のためにはそのプロセスもその目的に沿ったものでなければならず、自由が目的であるならば、多様性が尊重されるスタンスであると述べている。このリベラルアーツは何かの手段とせず、目的と手段を取り違えない教育であり、「問題発見型」であると述べている。この様な点から、negative capability では、時間をかけて蓄積した多くのデータからリアリティを形成し、結論を導くのに慎重である。多様性を重視し、全体最適を指向し、問題を自ら発見し、問題の入口から考え抜本的な解決を得ようとする。手段と目的を取り違えない人間教育が対応し、平時に養う能力であるとまとめている。

また、子育てにおける教育という側面でもnegative capability が取り上げられている。七木田（2018）は、子育てには、どうにも変えられない、とりつくすべもない事柄に満ち溢れており、子育ての困難感や将来への不安を持ち続けるということは、negative capability が育てこそ可能となると述べている。保育者として親や子どものnegative capability を育むことが

子育て支援において大切であり、親子の豊かな相互交流になるように気かけたり、何かの問題に対して子ども同士で考え抜く時間を持ち、解決を導き出そうとすることで、子どものnegative capability を育み続ける土台を作っていくことが大切だと述べている。そして、そのためには保育者自身もnegative capability を高めるため、人は本質的に対立や不均衡を深くはらんだ存在であるということ意識しながら保育者としての知識を得る努力を惜しまず、先人の教えに学び、眼前の出来事の価値を見極められる豊かな人間性をもって親子と接し続け、自らが成熟することを述べている。

Negative capability と「曖昧さ」、行為としての「待つ」

以上の様に4つの領域におけるnegative capability について概観してきた。ここで改めてnegative capability という用語に含まれる意味について以下にまとめてみると、多様な考え方や在り方を重視することや、複雑な状況や不確実性、耐え難い心理的状态に耐えること、あるいはそれを受容すること。また、早急に解決を求めずに、問題や目的にとらわれず積極的なアクションをしないことを積極的に選択することや、この状態や行為に対して希望を持つこと、無私の状態などが挙げられると考えられる。

続いては、このnegative capability と「曖昧さ」の関係、行為としてのnegative capability を「待つ」という行為から考察する。

米田（2012，p.5）は曖昧さの辞書的定義を「ものごとがはっきりしないこと、あやふやであること、不明瞭であること、怪しい、いかがわしいこと」とまとめている。この日常にある曖昧さに対する個人の反応についてはTolerance of ambiguity (AT) というワードによってこれまで研究されてきた。Frenkel-Brunswick (1949) はATをパーソナリティ特性として捉え、曖昧

さに対して intolerance かどうかによって現実適応が異なることについて検討した。また、米田 (2012) は日常において曖昧さが溢れており、これへの反応が重要になると指摘している。そして、曖昧さに対する反応の傾向を捉えた AT という概念は様々な場面での個人の行動やパフォーマンスの予測変数となり得る汎用性のある概念として様々な分野でその検討がなされていると指摘している。しかし、AT の邦訳が「曖昧さ耐性」や「曖昧さへの寛容」とあり、訳によって意味が異なってくるところが問題点としてあげられている (米田, 2012)。西村 (2007) は、従来、曖昧性耐性の低さという否定的態度を中心とした一次元的な観点から論じられてきたことを指摘し、曖昧さへの態度を多側面から検討し、曖昧さの享受、不安、受容、統制、排除、などの側縁から構成されることを報告している。また、米田 (2012) は AT の多次元構造として positive-negative, 接近-回避の 2 軸によって AT に関する因子をプロットしている。positive-negative の軸では曖昧さに対してポジティブ、ネガティブに捉えているか、あるいはニュートラルな評価をしているかという曖昧さへの認識の傾向を示しており、対処として曖昧さに接近するか回避するかという軸で捉えている。曖昧さの受容は 2 軸の中心に位置し、曖昧さをそのまま認めて受け入れられる、曖昧さへの親和性や寛容性を表す傾向を指し、曖昧さの程度を見極めるため、好悪の評価をせず、付かず離れずいること。自分の判断や価値を一旦脇に置いておくこととしている (米田, 2012)。

Negative capability と AT はともに曖昧さに関連する概念であると言えるが、両者を並列に並べて検討されている報告は筆者らが調べる限り見当たらなかった。negative capability において AT は概念の一側面を言い表していると言えるし、AT の視点から見た場合、negative capability は曖昧さの受容に近い概念であることがうかがえる。

では続いて、negative capability を発揮して

いる曖昧な状況を抱え、懷疑のなかにいられる力というのは行為としてどのように捉えることができるのかについて考察する。「待つ」とは鷺田 (2006, p.17) によると、「意のままにならないもの、偶然に翻弄されるもの、自分を越えたもの、自分の力ではどうにもならないもの、それに対してはただ受身でいるしかないもの、いたずらに動くことなくただそこにじっとしているしかないもの。そういうものに触れてしまい、それでも「期待」や「希い」や「祈り」を込めなおし、幾度となく繰り返されるそれへの断念の中でもそれを手放すことなくいること」と述べられている。また、その「待つ」という行為の中には、葛藤が含まれているとも述べている。それは待つことによって、待つという状況が必ず解消するとは限らない中で、いつどの様な結果になるかも分からない「いつか」に対して迎え入れる用意 (身の開け) をして待たなければならない。そして、何の保証もない状況の中で待つということに意識を置きすぎると、視野狭窄が促され、周りで起こる様々なことが「待つ」ことの終わりを指し示す徴候だと感じてしまう。待つことの終わりとは関係ない場合も多分にあり、再び待つことへと戻らないといけなくなるが、ここに葛藤が生じるといえる。その都度、あきらめと終ることの願い、失意と希望との間に葛藤を感じなければならない。「待つ」にはアンビバレントの中にとどまり続けるという、葛藤の中で踏みこたえるという性質があるといえる (鷺田, 2006)。

この様に、「待つ」という行為は、周囲からは何もしていない様な状態であると言えるが、その行為の中で生じる精神的な力動は非常に豊かで激しいものであるとも言え、鷺田 (2006) は「待つ」ことは、決して受け身の行為、無為ではない、と述べている。また、「待つ」ことを発酵になぞらえて説明もしている。それは偶然的な条件に任せるというより、関係の自生的な力に、その展開を委ねるものであり、待つ相手が自然と発酵していき、当人は場が成熟していくため

に己の期待を棄ててくわたし>を消去して「与えられた」と甘受し、その無明の役割を一つ一つ丁寧にやり遂げることで「場」の信頼感を醸成していくと述べている。

鷺田（2006）の「待つ」から negative capability を考えてみると、「待つ」という過程は、表面上は何らアクションを行っていない様に見えながらも、内実は、いつ終わりが来るともわからない不確実な（曖昧な）状況の中、身の開けを持ち期待や失望を繰り返す葛藤の中で踏み堪えるという心的過程であると言える。そして、その過程の中には『いつか来る「待つ」の終わり』への期待を捨て無私の状態で、「待つことの終わりのために」という目的とは関係のないことであっても目の前のことを丁寧に行動しながら、振り返った時に自然とその対象（これは相手が人間に限らず、不確実な状況そのもの）との関係性が成熟し結果として終わりに向かうことがあるという、一連のプロセスがあり、これが negative capability を発揮できている状態としてみるのではないかと考えられる。

Negative capability の多様性と曖昧さを抱える社会への拡張

冒頭に挙げた様に negative capability はその語に複数の意味が含まれている（松浦，1979）。また、時代的な背景に negative capability の概念が影響している点、人生の問題などストレスフルな状況における negative capability については従来から既に論じられていることについて触れた。今までの論を概括すると従来の定義では、不確実性について耐えるという側面を取り上げた定義となっていることが多い。不確実性や曖昧さを耐えることだけでなく、それを受容するという側面もあるため、negative capability という語の中に異なる概念が共存しているといえる。このため、どちらかに偏っているのは

negative capability を十分に言い表せないことが考えられる。また、多様性と曖昧さを抱える現在の社会に negative capability を用いるためには、現代の状況に沿った定義にアップデートする必要があるだろう。そして、深刻な心理的な危機を迎えている非常時だけでなく、平時にも negative capability 用いることができる視点が必要であると考えられる。このような点から我々は negative capability を「事柄や状況に対し、答えの見えなさ、相反する考えや感情、あるいは同時多発的に生じる複数の思考や感情を、有機体的な自己へ貯蔵し熟成させることができる力」と定義する。結果としてその行為自体に自身の望む様な結果の訪れがなかったとしても、定義のような葛藤の渦中で一人の個人がその状態を受け取り貯蔵し続けることで、その曖昧で不安定な事象に対して時間をかけて成熟させていける力として negative capability を捉えるのではないかと考えられる。

現代社会と positive capability、negative capability との交差

今一度、冒頭で述べた社会的文脈に戻って、それらと両 capability の関わりについて触れてみたい。まず、これまでの利益や効率を重視した社会は positive capability が過度に優先された社会であると言える。資本主義社会において日常における不満や不便さというニーズが山積しており、それをいかに解消して便利なものを生み出すか、ニーズに対してスピード感を持って問題解決や正解を求められることに価値があり、評価される文脈であったため、これまでは問題解決能力、つまり positive capability が重要視され、個人や社会がそれを求めていたと考えられる。

ではこれからの社会的文脈はどうだろうか？ 山口（2019）は現代の変化のトレンドの一つとして「社会の VUCA 化」をあげている。Volatile

(不安定)、Uncertain (不確実)、Complex (複雑)、Ambiguous (曖昧) の頭文字をとった概念で現在の我々を取り囲む状況であると述べている(山口, 2019)。また、落合(2018)は脱・近代は多様性の時代であり、それを支えるには人は学び続けなければならない、答えのない問いを立てながら常に自分を内省し続けられる人が常に伸び続けことができる。今後は学び続けることのできる人材が必要ではないかと述べている。VUCA化された社会で答えのない問いを立てながら問い続けるには、negative capabilityを発揮することが重要になると考えられる。答えの見えなさを自身の中に貯蔵し、自らの在り方や行動に「果たして意味があるのだろうか」と時に希望や失望を繰り返し抱きながら、それでも自らの望む結果が来るという期待は脇に置き、目の前のことを続けていくことで、自然とその答えの見えなさが熟成していくのだろう。このようなスタンスを持つことで、不確かさを抱え不明瞭な社会の中でようやくアクションをとることができるのではないだろうか。

ここで注意しないといけないことは、positive capabilityを全て否定して、ネガティブケイパブルな在り方一択でいくのが正解だ、と思考停止してしまうことだ。これはnegative capabilityのポジティブケイパブル化につながってしまう恐れがある。曖昧さの中でそれに耐えつつ、時にはスピード感を持って問題解決を行い、時には自然に成熟を待つ様な大きな枠で捉えていく姿勢が重要でないかと考える。

今後の展望

本論では多様性が求められる現代を生きる上で必要となる能力について negative capabilityの観点から考察を行った。negative capabilityの概念と現代における必要性について概観したが、具体的に negative capabilityを高める取り組みについては十分検討できていない。また、ATにおいてはその傾向を測定する評価尺度が

作られているが、negative capabilityに関してその様な尺度は筆者らが探す限りでは見られなかった。今後は negative capabilityを向上させるための方略の検討や、測定するための尺度作りなども必要であると考えられる。また、本論では主に日本語による先行文献からの論考に終始しており、十分に海外の文献についてみる事ができていない点が限界であると考えられる。しかし、VUCA化された社会において自らを見失わず精神的な健康を保ちながら生活していく上で、様々な分野で注目されている negative capabilityという概念が役に立つための一助となれば幸いである。

文献

- Bion, W. (1970): *Attention and Interpretation a scientific approach to insight in psycho-analysis and groups*: London, Tavistock publications. p.125
 Cambridge online dictionary: Capability <https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/capability> (2019.12.26.現在)
- Cambridge online dictionary: Ability <https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/ability> (2019.12.26.現在)
- デューイ, J. (1952): 『経験としての芸術』春秋社
 Dewey, J., *Art as Experience*. Michigan. Balch, 1934
- Fitzpatrick MA (1981): The Problem of Identity in Keats's Negative Capability *the Dalhousie Review Halifax* : 61(1) : 39-51
- Frenkel-Brunswik, E.(1949): Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of Personality* : 18 : 108-143
- 藤田一照 (2012): 『現代坐禅講義—只管打坐への道』佼成出版社
- 藤本周一 (2005): John Keats: "Negative Capability" の「訳語」をめぐる概念の検証 大阪経大論集 55(6) : 5-27
- グラットン, L., スコット, A. (2016): 『LIFE SHIFT (ライフ・シフト)』東洋経済新報社 Gratton, L. & Scott, A. *The 100-Year Life*, 2016.
- 帯木蓬生 (2017): 『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』朝日新聞出版社
- 平野順也 (2006): 資本主義社会における education としての教育を求めて—各市民の教育的責任の考察—: 九州コミュニケーション研究 4 : 9-29
- 池田明子 (2019): 『サー・トマス・モア』と共感力の力

亜細亜大学学術文化紀要 35：1-17

Keats, J. (1899): *The complete poetical works of Keats*.
Boston, Houghton Mifflin

松浦暢 (1979)：『キーツその夢と現実』吾妻書房 pp.80

松浦暢 (1971)：『キーツの手紙』吾妻書房 pp.68

松木邦裕 (2009)：『精神分析体験：ピオンの宇宙』岩崎
学術出版 pp.159

森山成彬 (2001)：芸術療法と表現病理Ⅲ 創造行為と
癒し 創造行為と negative capability 臨床精神医学
増刊号：191-195

森岡正芳 (2017)：『物語としての面接【新装版】ミメー
シスと自己の受容』新曜社 pp.133-147

中村義寿 (2019)：マネジメントにおける経済主義と人
間主義 名古屋学院大学論集 社会科学篇 56(1)：79
-93.

西村佐彩子 (2007)：曖昧さへの態度の多次元構造の検
討：曖昧性耐性との比較を通して パーソナリティ研
究 15(2)：183-194

落合陽一 (2018)：『0才から100才まで学び続けなくて
はならない時代を生きる 学ぶ人と育てる人のための
教科書』小学館

岡本英嗣 (2004)：雇用の効率化, コスト利益主義, 人
間らしさ, ヒューマン主義, 目標管理 目白大学経営
学研究 2：1-6

七木田方美 (2018)：ネガティブ・ケイパビリティ —
保育において大切にはぐくみたい力— 和顔愛語 47：
1-4

Sternberg RJ (1991) An investment theory of cre-
ativity and schizotypal traits. *Journal of nervous
mental disorders*: 176：648-657

杉原弘恭, 田口玄一郎 (2019)：ケイパビリティ・アプ
ローチ再考 生活学研究 4：42-68

高橋寛子 (2012)：心理臨床における「曖昧さ」とそこ
にとどまる能力 — 'Negative Capability' と '暗在
性' (the Implicit) からの考察— 京都大学大学院教
育研究科附属 臨床教育実践研究センター紀要 16：65
-76

飛谷渉 (2009)：アドレッセント過程におけるコンテ
ィング 精神分析研究 53(4)：397-404

鷺田清一 (2006)：『「待つ」ということ』株式会社
KADOKAWA

山口周 (2019)：『ニュータイプの時代 新時代を生き抜
く24の思考・行動様式』ダイヤモンド社

山根倫也, 越川陽介 (2020)：Person-Centered Approach
から見た Negative Capability —非指示的なセラピ
ストの中で起こっていること— サイコロジスト：関西
大学臨床心理専門職大学院紀要 10 53-60

米田晃久 (2012)：Tolerance of Ambiguity 概念の再考
と曖昧な場面における行動との関連—異文化接触場面
を中心として— 神戸大学 学位論文